

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇塩ビ製のなわとび

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景（78）－【櫛田神社と祭神】－

木下 清隆

■ [編集後記](#)

■ トピックス

◇塩ビ製のなわとび

愛知県守山市にある、国内でも有数のなわとびメーカー「ベルテック」社に塩ビ製のなわとびの歴史を聞きました。

なわとびの歴史は1878年ドイツ人教師を介して体操伝習所に輸入されたのが始まりと言われていいます。その後長い間、天然素材の麻と木製が用いられてきたなわとびの世界に今から56年前、昭和32年に塩ビ製なわとびが登場しました。

塩化ビニル樹脂が登場してから、なわとびの縄の部分はほとんどが塩ビ製になりました。

さらにベルテック社の前身である鈴木理化学工業所では新たな挑戦に乗り出します。外に透明な薄い水色、中に透明な薄いピンク、この2色の塩ビ樹脂を重ねれば、レインボーカラーのなわとびができないかと思って、いろいろと試してみましたが、なかなか上手くいかない。それが、あるとき金型を作り直してやってみたら、まったく思いがけずクルクルと螺旋模様が入ったキレイななわとびが出てきたのです。失敗作だったのだが、商品化したら大ヒットに。今では代表ブランドになり未だに作り続けている超ロングセラーだそうです。



螺旋模様入り塩ビ製なわとび

日本は、なわとびは小学校のものだと思っていて、中学生になるとなわとびはほとんど使わなくなってしまいます。小学生だけのものでなくなわとびの良さをもっと多くの人に知ってもらい、なわとび人口を増やし、日本人の体力向上に貢献したいという思いからNPO法人「日本なわとびプロジェクト」(JJRP)を立ち上げ、スポーツ団体関係者や研究者、なわとびパフォーマーなどとも協力し講演会・イベントなどを通じて、普及活動に力をいれているそうです。



「二重跳び名人」

2007年からは、なわとび世界チャンピオンの鈴木勝己さんとタイアップして、グリップに真鍮のおもりを入れて跳びやすくした「二重跳び名人」を発売しています。

なわとび世界チャンピオン 鈴木勝己名人のギネス記録

時間跳び	9時間46分1秒
二重跳び	1万133回
三重跳び	441回
四重跳び	98回
五重跳び	20回
六重跳び	1回



■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（78）－【橿田神社と祭神】－

木下 清隆

前回、欽明天皇によって、初代倭王に対し「くしたまにぎはやひのみこと橿玉饒速日尊」なる諡号が贈られたこと、更に、この諡号から生まれたと考えられる「橿玉命」が各地で祭祀された可能性があることを指摘した。今回はその例を幾つか紹介し、「橿玉饒速日尊」なる諡号が存在したことの傍証としたい。

伊勢松坂の橿田川沿いに「橿田神社」なる祠がある。神主が常駐しない小規模なものであるが、この神社の歴史はきわめて古いものと考えられている。その主祭神は「大若子命」とされているが「おおはたぬし大幡主命」なる別名も有している。先に、天照大神の伊勢遷座のところで、度会氏の祖である大若子命が、その受け入れに大いに功績があったことを紹介した〔[\(20\) 参照](#)〕が、その度会氏の祖が橿田神社の祭神である。

全国で、この橿田神社と称する神社は、判っている範囲で伊勢も含めて4ヶ所ある。伊勢以外では博多、神崎（佐賀）、射水（富山）であるが、神崎のみは現在、橿田宮と称している。そして、主祭神を大若子命としているのは、伊勢と博多の二社であるが、他の二社は「橿稲田姫」を主祭神としている。



伊勢 橿田神社



博多 橿田神社



神崎 橿田宮

伊勢の櫛田神社は、明確ではないが、度会氏が自分達の祖を櫛田川の辺で祭祀したのがその始まりのようである。その時期は、八世紀の前葉と推定されている。その理由は、大変難しい問題であるが、恐らく、彼らが持統朝になって、内宮の禰宜職を外された件が深く関わっていると考えられる。これまでの地位から降格させられ、危機感に駆られた彼らは、起死回生を図って、天照大神の伊勢遷座の功臣、大若子命を宣伝することにしたものと考えられる。そのための方策の第一が『太神宮本記』の制作と公開であり、第二がこの命の櫛田神社での祭祀であったと考えられる。なお、『太神宮本記』は日本書紀からの引用が多々あることから、書紀以降の制作であるとされている。

このような度会氏の作戦はもの見事に大成功を収める。まず、大若子命はあがたのいぬかい 県犬養 三千代を初めとする、時の朝廷の最高クラスの女性達の尊崇を集め、この人気は平安末期まで続いた。その名残は現在も京都の梅宮神社に残されている。あがたのいぬかい 県犬養 三千代は、『太神宮本記』を何かのきっかけで眼にして、大若子命の存在を知り、祭祀を始めたと考えられる。彼女は藤原不比等の妻となった女性であるが、歴代の天皇に仕えて忠誠を尽くした。そのことが、元明天皇の高い評価をうけ「橘宿禰」の姓を賜った。彼女は七三三年に亡くなるが、その後、従一位を追贈され、更に正一位まで贈られている。このように『太神宮本記』による大若子命の宣伝と、あがたのいぬかい 県犬養三千代による大若子命の祭祀とが、直接的に結びついているとするなら、この『太神宮本記』が世に出たのは、七二〇年の書紀の完成以降、七三三年の三千代の死までの間ということになる。従って、大若子命の存在が一般に知られ、その祭祀がある程度普及し始めるのは、八世紀中葉以降と推定されることになる。

以上が、大若子命の名声についてであるが、櫛田神社の方も、信じられないような高い評価を受けるようになる。それは以下のような文書が残されているからである。

「本社は、所謂式内社として其の御由緒の古き尊きが故に、古来朝廷の尊崇厚く、毎年祈年祭のほうべい奉幣に預り給へる神社なり。…古来神宮の殿舎は二十年毎に造替の例にて、其時神宮の七院と社十二処とを造替せられしが、延喜大神宮式には、その十二社中に櫛田社を挙げられ、・・・」

といった内容のもので、二十年に一度の遷宮のときは、櫛田神社もその対象となっていたことがわかる。当然、当時の櫛田神社はかなりの規模の神社だったと考えられるが、その後、室町時代になり、天皇家の力が衰えるに従い、櫛田神社も衰微する。終には他の神社に合祀されるまでになり、その存在が、歴史から消える。しかし、明治になって、有志によりその再建が図られ、現在、小さいながらも櫛田神社は復活している。

以上のような理由から、伊勢の櫛田神社で大若子命が祭祀される様になった時期は、八世紀前葉であると言えそうであるが、そうだとすると、困ったことが起きる。それは、伊勢以外の各社の創建時期である。或いは勧請時期と考えても良い。博多の場合、櫛田神社の創建は天平宝字元年（七五七）のこととされている。射水の場合は、天平宝字三年(七五九)の地図中にその名が記載されており、その創建は更に古いことになる。神崎の場合は不詳である。この博多と射水の場合には、中央の特殊な階層に知られ始めた大若子命の祭祀が、いきなり博多や越中まで伝播するののかという問題が出てくる。勧請する側の立場から考えると、「いま、都では大若子命なる神様がもてはやされているような。吾らもぜひ勧請しようぞ」といった具合になるかということである。現代人においても大若子命を知る人は殆どないと考えられるが、当時であっても同様といえよう。このような無名のしかも駆け出しの神を勧請したとはとても考えられないということである。

ここで、更に大きな問題が出てくる。博多の櫛田神社はなぜ、八世紀の中葉に大若子命を勧請したのか、という問題と、更に他の二社の祭神は異なるのになぜ、同じ櫛田神社を名乗っているのか、という問題である。特に博多で問題となるのは、大若子命と共に櫛田神社が勧請された時期は、朝廷の意向で立派な住吉神社と香椎宮が、創建されて間もない状況だったということである。これは神功皇后による朝鮮征伐の物証作りの一環であったと考えられるが、そんな中、何故、櫛田神社の勧請か、という問題が出てくるのかということである。

以上のように、櫛田神社の創建を八世紀の前葉から中葉とすると、どうも当時の歴史に符合しないという問題が出てくる。更に、神崎と射水の櫛田神社では、祭神と神社名との乖離が大きい。

このような問題を解くのは難問であるが、その解決には新しい考え方、仮説を導入してみるしかない。それは、櫛田神社の創建は遥かに古く、創建当時の祭神は別の神で、櫛田神社の社名はこの祭神に由来するものである、との考え方である。このような仮説が正しいとするなら、伊勢は八世紀前葉、博多は中葉にその本来の祭神が大若子命に替えられたことになる。射水の状況は分からないが、神崎の場合は、八世紀当時は殆ど衰微していたらしく、再興されたときに、残された櫛田の名に因んで「櫛稲田姫」が選ばれたと考えれば辻褃は合う。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

先日仕事で湯島にある「おりがみ会館」に行きました。

展示してある連鶴などもとても綺麗でした。小林館長様にうさぎとにわとりを折って頂いたのですが、あまりの速さと綺麗さに感動しました。

館長のお話で印象に残ったのは、おりがみを考えるのは創造することが出来る理数系の思考の持ち主で、文系の方は決められたものを作るのが上手だそうです。おりがみは脳の活性化にもいいと伺ったのですが、私は理系・文系に関係なく、おりがみは苦手なので活性化出来ません。(リマル)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)、[メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp